Japanese association of educational psychology

PA 70

アクションリサーチによる学級内関係性の形成過程(4)

—カンファレンスを通じての教師の関係性理解—

○鈴木宏明・市川洋子・秋田喜代美
(成蹊小学校・お茶の水女子大学大学院・東京大学)

【問題・目的】学校教育の現場において教師と研究者が対等の立場から分析を行い手段を講じてさらにその経過を観察していく研究手法がアクションリサーチである。本研究では「朝の会・帰りの会」を継続観察し、定期的にカンファレンスを行うことで、学級の子ども・教師の関係性を1年間縦断的に観察した。

前回の発表(2000. 発心)では、カンファレンスを経ることで教師が子どもへの対応を変えることで、子ども同士の関係性も変化し、教師がカンファレンスを重視するようになったことを分析した。しかし、カンファレンスを重視することで、教師の意図した指導計画がどのように変化して行ったのか、子どもの関係性はカンファレンスによってすべて変化したのか、実践者の立場からアクションリサーチの手法はどのように現場に生かしていけばよいかなどの課題が残った。今回はこうした点を分析しようとするものである。

【方法】発表者の担任する小学校2年生の学級を毎週金曜日1年間(計30日)継続観察する。おもに朝の会と帰りの会をカンファレンスの対象とした。

記録はビデオで、およそ1ヶ月半に1度、席替えによって子どもの位置関係が変わる度に教師と研究者が6時間ほどかけてカンファレンスの時間をとった(99年5月から2000年3月まで計7回)。朝の会・帰りの会とカンファレンスは文字化して記録もした。

【結果と考察】子どもは1年生の時からメンバーが変わらず、担任教師だけが2年生になってからかわった。教師は、子どもの関わり合いが少ないために子ども同士の関係性が薄く、コミュニケーションの力が育っていないと考え、朝の会・帰りの会をはじめ、話し合いや係活動、学級全員で遊ぶ機会やグループ机による班編成学習など、子どもが関係する場を意図的に設定した。カンファレンスをすることで、この指導計画を修正しながら、個別の子どもに対応するという方法をとってきたが、それが問題に対してどのような役割を果たしたか考察を加えていきたい。

① カンファレンスによる指導計画の変化

7回のカンファレンスによって、これらの教師の指導計画は大きな変化をもたらした。まず初回から4回目ぐらいまで(2学期の初めまで)は、教師はカンファレンスで指摘を受けたことや、教師がビデオを見ることで見つけた子どもへの配慮不足を、そのまま次回までに個々の子どもや全体に向けて手を講じて切り替えてきたものが多い。個人的な批判発表が多くなったために、会での発問を替えたり、関係性を作れなかった子どもへの対応をとくに配慮したことがそれである。

しかし、2学期後半からは、カンファレンスで指摘を受けたり、子どもの変化を認めたりしても、すぐに対処することは少なくなっている。これは、教師のそれまでの経験や、継続すべきだと判断した指導計画の実行をふまえて、カンファレンスの指摘を含めて包括的に指導計画を考えるようになってきたからである。

② 子どもの関係性はどう変わるのか

カンファレンスで指摘を受けた子ども、とくに他者との関係性がうまくとれない子どもに対しては、教師がその事実を認め、どのように配慮すべきか具体的手だてを講じることによって、かなりその子どもの問題は改善され、関係性をつけることに自信が持てるような効果的な援助をすることができた。発心論文におけるA児・B児の例はそれである。

しかし、3学期に入って徐々に声を失っていった女子、とくに女子から女子への指摘はとうとう活発にならなかった。全体を通して、金曜日に発言がなかった子どももいた。これは、カンファレンスだけですべての関係性を解決していくことはできないということを示唆している。

③ アクションリサーチをどう実践に生かすか

アクションリサーチによって、今担当している子どもの関係性を継続的、しかも具体的な手をうちながら研究していけることは、現場の実践者にとって大きな援助になることは間違いない。課題がまず実践にあってそこから研究がスタートし、らせん状に継続的な観察が行えることは大きな意義である。学級崩壊などの問題が表面化し、教師が子どもとの関係性を掴みにくくなっている現状では、さらにその意義は増すと考えられる。だが、この手法はすべてに万能ではない。それに至るまでの的確な問題把握と、柔軟な対応能力などが求められる。そのためにも、開かれた現場と研究者の分析・検討がリアルタイムに行われるべきだ。

NII-Electronic Library Service